

自己点検・評価報告書（デザイン学部）

基準2. 学生
2-2 学修支援

点検・評価項目	平成26年度から平成30年度 までの実績を踏まえた現状	自己評価 (a : 効果が上がった点 b : 改善が必要な点)	今後の計画	
			効果が上がっている点の 発展計画	改善が必要な点の改善計画 (次年度計画及び中期的計画)
① 教員と職員等の協働をはじめとする学修支援体制の整備				
教職協働による学生への学修支援に関する方針・計画・実施体制を適切に整備・運営しているか。	全学教育委員会、学生支援等連絡会など、学修支援にかかわる全学委員会や各学部教務委員会、学生委員会には、教員、事務職員の両方が出席して、意見交換・議論を行い教学にかかわる議論をしている。ボランティア体験、ハラスメント防止などに関わる授業や学修支援センターの運営には、教員だけでなく、事務職員も大きく関与している。デザイン学部では、各演習科目担当教員による「感性演習・スキル演習教育連絡会」、専門演習・卒業研究の「各専攻別教育連絡会」という演習科目別の教育連絡会を月に1度開催し、授業における学生の修学状況を確認し、問題解決に取り組んでいる。	a : 教員と事務職員が協働して学修支援を行う仕組みが確立しており、さらに発展させる。学部における教育連絡会により、問題ある学生の教員同士での情報交換、さらには問題についての意見交換を行い、改善につなげている。また議事録を学部全教員で共有し、学務課とも連携をとりながら問題の早期発見と対応を行っている。 b : 学修支援センターの存在を知らない学生がいるため、活用するように促す。	他の大学での成功事例を収集し、SD、FDの一環として共有することにより、教員と職員が協力して、学修支援にあたる。フレッシュャーズゼミ、キャリアデザインでの授業と学修支援センター（文章表現）、キャリアサポートセンター、図書館との連携を進める。	アドバイザーグループでの面談等で、各学生について、学修に困難を感じている授業を詳細に把握し、学生任せではなく、アドバイザー教員が学修支援センターの担当教員らと情報を共有し、当該学生の利用を勧告する。
障がいのある学生への配慮を行っているか。また、具体的にどのような配慮をしているか。	障がいのある学生に関して、「アドバイザー教員」（フレッシュャーズ・ゼミや研究室の教員）を通じて早期把握し、学部と学務課において情報集約している。四肢の障害に加え、発達障がいなど精神面や大学生生活に障がいのある学生に対しても、他の学生と平等な学修環境を実現するための努力を行なっている。入学前に保護者からの希望を聞き対応可能な事項について配慮を行ってきた。環境整備の一環として、自動ドアの設置、階段シール整備の整備などを行った。 障がいを持つ学生については、身体障害、知的障害、精神障害など種類別、その重度により個別の配慮を行っている。配慮を望むと申告してきた学生には、要望を聞き取った上で対処している。その他の配慮が必要と思われる学生については、個別の面談を通して、配慮を希望するか否かの意思確認をした上で、適切な対処をしている。	a : 各個人の状態に合わせて合理的な配慮を行っており、学生の反応も概ね良好である。 b : 重い症状の場合は、教員のみで対応することが難しい。	問題を抱える学生を早期に把握するためにも、アドバイザーグループ担当教員、演習授業担当教員の連携を強化する。	問題が生じた場合に、速やかに相談できる専門的な知識を持つ職員が必要と考える。
オフィスアワー制度を常勤・非常勤を問わず全学的に実施しているか。	すべての授業科目で、常勤、非常勤を問わず、シラバスにオフィスアワーの記入を義務付けている。シラバスでの表記が義務づけられていることもあり、授業担当の専任教員および非常勤（兼任講師）は実施している。	a : シラバス点検時に、よりオフィスアワーに注意して点検する。相談したい学生が、確実に教員とコンタクトできるようになった。 b : オフィスアワーに教員を訪れる学生はそれほど多くない。	シラバスチェックの際に「メールで問い合わせること」といった記載があれば、確保している曜日・時間を具体的に記入するよう科目担当教員に求めることにする。 研究室に直接訪れるのではなく、メールやMoodleを活用し、あらかじめアポイントをとるような仕組みを作る。	教員室のドアの掲示やデザインを工夫し、より学生が教員を訪問しやすくする。 オフィスアワーの時間も制限があり、相談に訪れた全ての学生の対応が困難な場合もあるため、メール等であらかじめ相談内容を把握し、面談時間を短縮するなどの仕組みを作る。
中途退学者、休学者及び留年生への対応策を行っているか。	休学や退学を減らすため「アドバイザー制度委員会」を設置し、対応策を立案実行している。学生への面談やアンケートを通じて、休退学に至る理由や状況を分析し、授業の改善や学修環境の改善などに役立てている。アドバイザー教員は休退学希望者との面談を行い、休学中には復学にむけたフォローを行っている。中途退学者、休学者への対応は、各演習ごとの教育連絡会で欠席が続いている学生、問題ある学生についての情報共有を行っており、休退学につながりそうな学生を早期に発見し、AG（アドバイザーグループ）担当教員が学生との面談を行うなど対応を行っている。	a : 定期的に連絡を取ることで、休学中も復学する意欲を失わず、早期に復学することができた。 b : 早期に復学できる数を増やす。	休学中にも自宅でできる課題等を課し、復学へ自信を持たせることで、休学というコンプレックスを抱かせない。	現状では早期に復学できる数は少ない。精神的な理由によるものが半数以上であるため、専門的な知識を持つ職員と連携する仕組みを作る必要がある。

自己点検・評価報告書（デザイン学部）

基準2. 学生
2-2 学修支援

点検・評価項目	平成26年度から平成30年度 までの実績を踏まえた現状	自己評価 〔 a : 効果が上がった点 b : 改善が必要な点 〕	今後の計画	
			効果が上がっている点の 発展計画	改善が必要な点の改善計画 (次年度計画及び中期的計画)
② TA等の活用をはじめとする学修支援の充実				
教員の教育活動を支援するために、 TAなどを適切に活用しているか。	実験科目、演習科目、大人数の講義科目などを中心にTAを配置し、教員の監督下で、授業の補助を行っている。また、フレッシュゼミにSAを配置し(ピアサポーター)、同年代の学生の目線を授業運営に採り入れ、入学者が早期に大学生活へなじめるように工夫している。 次年度非常勤講師採用計画を毎年11月より開始し、各授業での運用上適切な配置検討を行なっている。採用担当教員が授業に必要な非常勤講師（兼任講師、演習講師、TA、SA）を予算と需要等適切かどうか学部予算の枠組みを踏まえて調整を行なっている。	a : 履修学生の出席管理や、演習の準備作業などを任せることで、教員が教育指導にかける時間が増えた。 b : 大学院開設に伴うTA制度の見直し。	現状をベースに、業務内容を精査しより一層の効率化を図る。	現在他大学からTAを募っているが、来年度より大学院が開設されるため従来のTA制度を見直し、新たな制度作りを計画する。

自己点検・評価報告書（デザイン学部）

基準2. 学生
2-3 キャリア支援

点検・評価項目	平成26年度から平成30年度 までの実績を踏まえた現状	自己評価 〔 a : 効果が上がった点 b : 改善が必要な点 〕	今後の計画	
			効果が上がっている点の 発展計画	改善が必要な点の改善計画 (次年度計画及び中期的計画)
① 教育課程内外を通じての社会的・職業的自立に関する支援体制の整備				
インターンシップなどを含め、キャリア教育のための支援体制を整備しているか。	1年次「フレッシューズゼミⅠ、Ⅱ」に始まり、2年次「キャリアデザインⅠ、Ⅱ」、3年次「キャリアデザインⅢ、Ⅳ」全てのカリキュラムを毎年見直しながら、内容の継続性、重要な部分の復習を重視し、また最新の動向、就職協定などに則ったテーマに限り、適時性のある授業を進行している。	a : 1年次から連続性のあるカリキュラムを構築してキャリア形成を意識させることができている。 b : 年次毎の学生気質の把握、人気の就職先や学部にあふさわしい企業の開拓、大学院進学希望の学生対応等が必要である。	キャリアデザイン科目の内容を拡充させて学部の専門性を強く意識させる、またはアピールさせるための学部独自のカリキュラム作成が急務である。	新たに設置する大学院への進学を希望する学生に対応したキャリアデザイン教育の内容を確立させる。さらに大学院での就職先についても同様の精査が必要である。
就職・進学などに対する相談・助言体制を整備し、適切に運営しているか。	全学生に進路指導担当教員を設定して、卒業制作指導と個人面談を重ねてきた。また、毎月の学部長による就職ヒアリングにより学生個人の活動状況を把握し、情報を教員間で共有する体制を継続している。2017年度から学生の希望により進路指導担当教員を決定することで、学生の研究領域、進路の希望などを把握しやすくなった。	a : 教員が学生一人ひとりの進路希望を把握することで、デザイン系の学部としては高い就職率を堅持している。 b : 学生が進路指導の教員を選択できるが、教員間の負担に差が生じている。	今後はデザイン学部の目指すべき企業の候補を精査し、既卒生の就職先などの情報をリアルタイムで収集しつつ、現状の進路指導体制を維持していく。	キャリアサポートセンターと協議を重ねつつ、現状の進路指導体制を維持する。
他大学のキャリア支援に関する取り組みなどを収集・分析し、キャリア支援体制の見直しなどに役立っているか。	毎月開催されるデザイン学部就職委員会においての情報交換、実績のある他大学、または学部と競合する大学のキャリア支援に関する現状を報告、必要に応じて資料を入手したり、調査をしている。	a : 特にデザイン系の競合大学、大学院の動向を注視することで、自学部の優位な点でアピールすべき部分が見えてきた b : 一般の大学のキャリア支援、就職支援体制の調査には目が向いていない。	他大学のキャリア支援と学生相談などの事例の取得や交流を実施する。首都圏デザイン系の大学の就職担当者研修で提案があった学部・大学間で連携して学生をアピールする方法を検討する。	ホームページの活用を前提にして、デザイン学部受験生へ、これからの社会で「デザインでできること」のアピール、業態の変化に伴う形でデザイン業界の新しい地図を作成した。

自己点検・評価報告書（デザイン学部）

基準2. 学生
2-4 学生サービス

点検・評価項目	平成26年度から平成30年度 までの実績を踏まえた現状	自己評価 〔 a : 効果が上がった点 b : 改善が必要な点 〕	今後の計画	
			効果が上がっている点の 発展計画	改善が必要な点の改善計画 (次年度計画及び中期的計画)
① 学生生活の安定のための支援				
学生サービス、厚生補導のための組織を設置し、適切に機能させているか。	毎月開催している学生委員会で各学科のトラブルや対処ノウハウなどを共有するとともに、状況に応じて学務課や学生相談室と連携し対応している。	a : アドバイザー制度を活用し、学生の有意義な大学生活を支援できる指導体制が構築できた。 b : さらなるサポート体制の充実	トラブルシューティングに早めに対処するための情報蓄積、分析、活用の具体策を検討する。	学生の精神・心理・社会的な問題を類別し、全体を可視化できるシステム作りを行い、その上で適切なアドバイスを与えうる人的資源の確保を考える。
奨学金など学生に対する経済的な支援を適切に行っているか。	学生支援等連絡会で報告された内容をもとに奨学生を把握し指導に活用している。また、面談時に経済的な問題があると判断した場合は、学務課奨学金担当者と連携し問題を解決を図っている。	a : 各学科に在学する奨学生の情報を共有し、学務課奨学金担当者と連携した結果、大きな問題なく経過した。	奨学生の生活背景を鑑みた細やかな対応策の検討が必要である。	トラブルを生じる可能性のある学生の早期発見、早期対処・問題解決のシステム作りを検討する。
学生の課外活動への支援を適切に行っているか。	サークルを担当する顧問教員だけでなく、学部の特色を生かした学外活動を企画し学生をサポートしている。	a : サークル活動、各学科の学外活動などが報告され、学生生活が充実した様子が伺えた。 b : 具体的な活動への参加度合、満足度調査等の詳細な実態把握が必要。	学外活動に参加する場を増やす工夫や参加学生を増やすこと、また社会生活に上手く対処できない学生を導くことの方策を考案したい。	学生の意見も取り入れ、教員・学務課との協働により、双方向の情報を集約し、対応策を検討する。
学生の心身に関する健康相談、心的支援、生活相談などを適切に行っているか。	学修支援室、カウンセラーを配備し、必要と思われる学生には自ら、または担当教員の紹介により相談する機会が与えられるシステムができた。活用する学生数も年々増えている。	a : 学修支援、カウンセリングシステムに着手できたこと b : 多様な学生に対し、よりの確に対応できるスタッフの割り出しが必要	学修支援室、カウンセラーの具体的な利用率を調査し、継続した学修支援システムを考えたい。	心理カウンセリングの他、精神疾患を有する学生への対策、学修障害等多様化する問題学生への総合的対策システムの構築が必要である。

自己点検・評価報告書（デザイン学部）

基準2. 学生
2-6 学生の意見・要望への対応

点検・評価項目	平成26年度から平成30年度 までの実績を踏まえた現状	自己評価 〔 a：効果が上がった点 b：改善が必要な点 〕	今後の計画	
			効果が上がっている点の 発展計画	改善が必要な点の改善計画 (次年度計画及び中期的計画)
① 学修支援に関する学生の意見・要望の把握・分析と検討結果の活用				
学生への学修支援に対する学生の意見などをくみ上げるシステムを適切に整備し、学修支援の体制改善に反映させているか。	授業アンケートを全科目で実施している。また、在学生調査を各学年(新2年生、新3年生、新4年生)で実施している。さらに学修支援センターでは学修の問題を抱える学生の相談に個別に乗ると同時に、学修支援センター指導員、学務課職員、教員による懇談会を年2回実施している。主要な建物に匿名でも投函可能な意見箱(Box for Best Care:BBCと命名)を設置し、学長室が直接開箱することにより、ハラスメントを含めた学修上の訴えを受け付け、必ず回答している。回答は、学生ポータルサイトに掲載している。デザイン学部ではアドバイザー制度での定期的なミーティングを実施し、その中で学修支援についてのアンケート調査を行っている。理解するのが難しい授業や、担当教員の指導方法、改善を望む点などを把握し、分析と検討を行っている。それにより必要に応じて改善策を講じている。	a：2018年度より、授業アンケートおよび在学生調査の調査項目を見直し、データ取得方法を紙ベースからWebベースに変更した。 理解するのが難しいと回答する数が減少した。教員の指導法が改善された。 b：学修ポートフォリオの整備による学生自身による学修振り返りとその内容の教員による把握を進めることが必要である。デザインの開設科目については、教員間の情報共有ができていないが、教養科目担当の教員とは情報の共有が難しい。	授業アンケートや在学生調査で取得したデータのIRセンターでの解析をすすめる。 ミーティングの回数を増やし、現在より短いスパンで、学生からの情報を得る。	学修ポートフォリオの何らかの形でのシステム化をおこない、学生自身が自己の学修内容を振り返りができるようにする。 デザイン学部の教員と教養科目担当の教員が情報共有できる機会を作る。
② 心身に関する健康相談、経済的支援をはじめとする学生生活に関する学生の意見・要望の把握・分析と検討結果の活用				
学生生活に対する学生の意見などをくみ上げるシステムを適切に整備し、学生生活の改善に反映しているか。	学生生活に対する学生の意見要望は、第一義的には「アドバイザー教員」が受け、学部ごとに各種アンケート調査などを通じた把握を行なっている。学務課・学生係では、ハラスメントを含めた学生意見を広く受け止める窓口を設けている。また、意見箱（BBCボックス）を学内各所に設けることで日常的な要望を集約し、学生生活の改善に役立てている。 上記①のアンケートに学生生活に関する次の質問項目を設けている。「学生生活は順調であるか」「悩み事や相談事はないか」これらの回答を分析し、必要に応じて個別の面談等を実施している。また、回ごと、年度ごとに統計をまとめ、各項目の推移を分析しながら、学生生活の改善に努めている。	a：定期的にアンケートを実施することで、問題を発見した時点で速やかに対処することができた。 b：精神的な問題を抱える学生に対して、指導が十分でないことがある。	アドバイザーグループ単位でのミーティングに加え、必修の演習科目内でも定期的に面談するなど、見落としがないよう仕組みを強化する。	精神的な問題を抱える学生の数が増加傾向にある。そしてほとんどが休学や退学をする現状にある。卒業まで安定した学生生活が送れるように、学部と学務課および学生相談室の連携を図り、サポートを強化する。
③ 学修環境に関する学生の意見・要望の把握・分析と検討結果の活用				
施設・設備に対する学生の意見などをくみ上げるシステムを適切に整備し、施設・設備の改善に反映しているか。	上記②と同様に学生係の窓口、意見箱など多様なチャンネルを通じて、学生の意見をくみあげている。「アドバイザー教員」を通じた聞き取りやアンケートからも要望を吸い上げている。特に教室環境、インターネット環境、学生食堂やトイレなど、要望の多いものには常に施設・設備の改善に取り組んでいる。環境改善要望については、受付メールアドレスを公開している。 期末ごとに実施される授業評価アンケートに施設・設備に関する質問項目を設けている。また演習授業では意見や要望がないか都度教室内の空調や、演習室内の設備についての要望には、速やかに対応するよう努めている。	a：学生からの意見や要望に対して速やかに対処することで、年々申告する数が減少している。 b：身体的障害を持った学生への対応。	演習授業で使用する作業机や椅子が購入から10年経ち、破損や汚損が目立つ。作業環境を快適に保つためにもそれらのメンテナンスや入れ替えを計画する。	身体的障害（視覚的、聴覚的）を持つ学生に対する環境整備を行う。今後を見込み、種々のケースを想定し検討する。

自己点検・評価報告書（デザイン学部）

基準3. 教育課程
3-1 単位認定、卒業認定、修了認定

点検・評価項目	平成26年度から平成30年度 までの実績を踏まえた現状	自己評価 a：効果が上がった点 b：改善が必要な点	今後の計画	
			効果が上がっている点の 発展計画	改善が必要な点の改善計画 (次年度計画及び中期的計画)
① 教育目的を踏まえたディプロマ・ポリシーの策定と周知				
①-1 教育目的を踏まえたディプロマ・ポリシーを定め、周知しているか。				
各学部、研究科が定める教育研究上の目的を達成するための適切なディプロマ・ポリシーを定めているか。	大学全体で定める共通のディプロマポリシーを定めている。さらに、大学共通のディプロマポリシーに専門的能力を具体化した形で、学部ごとにディプロマポリシーを定めている。大学院については、専攻ごとに定めている。 デザイン学部では社会で必要となるデザインの6つの力「チーム力」「集中力」「提案力」「実現力」「取材力」「発想力」を人材育成の柱としてそれをシンボルマークとして扱っている。	a：3年次の専攻ごとに配属が決まった段階で学生のディプロマポリシーの達成度を自己・他者（教員）による評価を実施し、これまでの自分と今後の自分について確認している。	-----	-----
ディプロマ・ポリシーをどのように公開しているか。また、その方法は適切か。	大学のウェブサイト、大学案内、学生便覧において公開しており、適切な公開方法である。	-----	-----	-----
② ディプロマ・ポリシーを踏まえた単位認定基準、進級基準、卒業認定基準、修了認定基準等の策定と周知				
ディプロマ・ポリシーを踏まえた単位認定基準、進級基準、卒業認定基準、修了認定基準等を適切に定め、周知しているか。	各科目とディプロマポリシーに定めたラーニングアウトカムズの対応関係を示したカリキュラムマップを作成し、科目ごとの到達レベルをシラバスで記述している。1年から2年の進級要件および卒業研究の着手要件を定め、学修状況に応じた科目履修を進めるとともに学修が困難な学生の早期の発見に努めている。卒業認定基準は所定の科目の履修によって認定しており、各科目で定めたラーニングアウトカムズとの対応の相対でディプロマポリシーを保証している。進級要件、卒業要件は、学生便覧に記載し、学生および教員に配布している。カリキュラムマップは、1年生に配布する履修案内およびウェブに掲載している。 演習における成績評価についても教員の主観的評価でないことを示すために、明確な評価基準を1年次から4年次までの演習科目で設けて、それを学内ウェブサイトや授業で周知している。	a：卒業研究の着手要件の見直しを進めている。 演習における成績評価が成果物のみではないという意識を学生がもったことで授業に取り組む姿勢に効果が表れている。	卒業研究の着手要件について、進級率、卒業実績などのデータをもとに、継続的に見直しており、2019年入学者から新たな要件に見直した。 専門研究・卒業研究の着手要件を見直し、必要要件として新たに「スキル演習」の単位修得をも加えることで、これまで修得率が悪かった当該科目への取り組みが変わってくることを期待できる。	-----
③ 単位認定基準、進級基準、卒業認定基準、修了認定基準の厳正な適用				
単位認定基準、進級基準、卒業・修了基準を定めて、これを厳正に運用しているか。	各科目の単位認定にあたっては、シラバスに単位認定基準(成績評価基準)を明示し、各教員がシラバスに従った評価を行っている。シラバスが学生と教員との契約であるとの意識を、全学教育委員会を通じ、学部教務委員会、学部教授会で教員へたびたび周知している。卒業認定については、学部教務委員会および教授会において、それぞれ根拠資料を回覧し、厳正に運用している。	a：学部教務委員会、教授会、学務課が相互にチェックしあいながら、厳正な基準の運用ができています。	教職員が高い意識を保ち、連携するための情報の共有と研修の充実を行う。	-----
単位認定基準、卒業・修了基準を定めて、教育課程の編成・実施に反映させているか。	現状の教育上の問題点を学部教授会およびアゴラで確認することにより、現状カリキュラムの問題点を共有している。学術や社会の変化に加えて、各科目の単位取得状況、退学率、進級率をモニタリングすることによって、カリキュラムの継続的見直しを学部教務委員会が中心となり、4年に一度の頻度で行っており、その見直しの全学的な調整を全学教育委員会がおこなっている。	b：各分野の専門力育成のための授業は提供されているが、コンピテンシーの育成が十分にされているのか評価がされていない。	-----	ラーニングアウトカムズのとくにコンピテンシーの定量化をすすめるとともに、コンピテンシーの育成により配慮したカリキュラム設計をすすめる。
単位認定など成績評価の公平性のためにどのような工夫をしているか。また、GPAなどをどのように活用しているか。	担当教員による判断のばらつきが出ないよう、成績分布に関してガイドラインを設定し、全科目の成績分布を教授会もしくはアゴラで確認することにより、教員相互にチェックしあっている。GPAを算定し、成績表によって学生へ周知するとともに、GPAを単位の上限キャップの緩和、早期卒業制度の適用、コースの決定、研究室の決定に活用している。デザイン学部では演習における評価基準を設けたことで、教員ごとに偏りのない単位認定を行なっている。	b：評価基準の統一を一層進める必要がある。とくに卒業製作/卒業研究の評価の統一が望まれる。授業評価アンケートの結果や成績評価分布の公開（アゴラや教授総会）によって科目による自己点検として効果がある。	演習による評価基準を定めたことの検証を今後も進めてよりよいものにしていく。	ルーブリックを用いた卒業研究の評価および卒業研究の各ラーニングアウトカムズへの対応の実質化をおこなう。

自己点検・評価報告書（デザイン学部）

基準3. 教育課程
3-2 教育課程及び教授方法

点検・評価項目	平成26年度から平成30年度 までの実績を踏まえた現状	自己評価 〔 a : 効果が上がった点 b : 改善が必要な点 〕	今後の計画	
			効果が上がっている点の 発展計画	改善が必要な点の改善計画 (次年度計画及び中期的計画)
① カリキュラム・ポリシーの策定と周知				
各学部、研究科が定める教育研究上の目的を達成するための適切なカリキュラム・ポリシーを定めているか。	大学全体で定める共通のカリキュラムポリシーを定めている。さらに、大学共通のカリキュラムポリシーに専門分野を具体化した形で、学部のカリキュラムポリシーを定めている。	b : カリキュラムポリシーの設定はおこなったが、教育の現状をもとに、その継続的な見直しを議論していく。	-----	学修成果のモニタリングをもとに、カリキュラムポリシーが不変でよいかを不断に点検し、必要があれば見直していくことを検討する。
カリキュラム・ポリシーをどのように公開しているか。また、その方法は適切か。	大学のウェブサイト、大学案内、学生便覧において公開しており、適切な公開方法である。	-----	-----	-----
② カリキュラム・ポリシーとディプロマ・ポリシーとの一貫性				
カリキュラム・ポリシーとディプロマ・ポリシーの一貫性が確保されているか。	カリキュラムポリシーでは、全学部共通の6つのラーニングアウトカムズを育成するプログラムを定めており、このうち、専門力の部分に学部の特色があらわれている。ディプロマポリシーにおいても、6つのラーニングアウトカムズの達成を規定しており、両ポリシーは整合している。	-----	-----	-----
③ カリキュラム・ポリシーに沿った教育課程の体系的編成				
カリキュラム・ポリシーに即した体系的な教育課程を編成し、実施しているか。	全学共通のカリキュラム上の特徴としては、フレッシュャーズゼミを1年次に配置し、少人数クラスによるクラス担任制と一体となった運営をしている。学部で提供する専門基礎科目、専門科目では、講義のほかに、実験科目、演習科目、卒業研究、学外実習などを効果的に配置している。	-----	学部の体系的な教育課程の見直しを中期目標として学部長を中心とした検討委員会を設けて検討している。	-----
シラバスを適切に整備しているか。また、作成にあたって第三者による検証を実施しているか。	シラバスは、全学で共通のものを教務システムから教員が記入する。シラバスが学生との契約である意識を徹底し、評価方法の具体的な記載、ラーニングアウトカムズとの対応、などまで含めて、記載内容を明確に教員に徹底している。書かれたシラバスは、学部の教務委員長が中心となり、記入者以外の教員がチェックし、また、事務職員も内容を確認している。各演習科目によってカリキュラム内容に偏りがないように統一的整備を行なっている。	a : それぞれの特色を活かしつつ、各専攻に偏りのでないカリキュラムを実施している。	-----	-----
④ 教養教育の実施				
教養教育を適切に実施しているか。	蒲田キャンパスの2学部では、学部ごとに教養教育カリキュラムを編成している。デザイン学部においても、外国語、自然、人文社会、ウェルネスの各科目群と社会人基礎科目の一部の企画、立案、実施を教養学環が担当しており、学部との調整を綿密に行っている。海外語学研修などの海外プログラム、スキー実習など特色ある科目も提供している。	a : 教養教育科目の各学部との連携の強化 b : 教養教育全体像の可視化と公開	従来より、教養教育科目の教育は学部との連携によって行われてきたが、今後も連携と自主性のバランスを保ちながら、教養教育を実施する。	同じ科目群内や異なる科目群間の関係ある科目間の関係をネットワーク図等で可視化し、教養教育全体や科目間関係の学生理解を深め、学修効果を深める。
教養教育を担当する組織の活動状況等を適切に把握しているか。	教養学環は、独自の教授会、独自の教務委員会を持ち、大学評議会、教育力強化委員会、企画推進委員会そのほかの全学の委員会に独自の委員を参加させている。また、学修支援センターの運営に大きく関与している。	a : 教養学環の組織の維持・活性化の促進 b : 教養教育の目的・目標の教養教員全体での共有と目標達成への協働の促進	新任教員を補充する際には、担当科目の専門性を有していることはもちろんのこと、各種の学外研修など多面的な教養教育活動を支えることができる教員を積極的に採用する。	2キャンパスや各科目群教員間の連携・情報共有が一層重要になってくるので、ICTを活用するなどして、活動状況・情報の可視化と教員間での共有を促進する。

自己点検・評価報告書（デザイン学部）

基準3. 教育課程
3-2 教育課程及び教授方法

点検・評価項目	平成26年度から平成30年度 までの実績を踏まえた現状	自己評価 〔 a : 効果が上がった点 b : 改善が必要な点 〕	今後の計画	
			効果が上がっている点の 発展計画	改善が必要な点の改善計画 (次年度計画及び中期的計画)
⑤ 教授方法の工夫・開発と効果的な実施				
アクティブ・ラーニングなど、学生の主体的な学びを促す授業内容・方法に工夫をしているか。	アクティブラーニング、反転授業、グループ学修、プロジェクトベースドラーニング(PBL)について、全教員が参加する全学教職員会でその手法を紹介し、授業ごとのこうした手法の活用の有無について、教員への授業方法アンケートでモニタリングしている。これらのうち、アクティブラーニングについては、教員による授業評価の評点項目としている。	a : 授業方法アンケートの教員への実施 b : 反転授業などを支えるインフラが動画配信など大容量配信には十分ではない。授業ごとの課題(宿題)が一時期に集中することやそのボリュームの検証が必要である。	授業方法アンケートを継続的に実施し、IRセンターにおいて結果の解析を行う。	反転授業などを支える大容量データを配信できるIT環境を整備し、反転授業の撮影など教材準備を行う部署を設置する。
教授方法の改善を進めるために組織体制を整備し、運用しているか。	教育力強化委員会を設置し、主として、教員による授業評価の実施および結果の報告、教員研修、学生による授業アンケートの集計、教員の各授業での成績分布のモニタリングとフィードバックなどの業務を担っている。	a : 教育力強化委員会を学長直属で設置し、学長室が事務補佐をしている。 b : 授業アンケート結果や成績分布をもとにした授業の改善が十分ではない。	教授方法、教育改善などに精通した事務職員の継続的育成と教育方法を専門とする教員の採用をおこない、教員に対する教育支援組織を整備する。	学生の授業評価、成績分布などを、学部教務委員会、教授会、アゴラなどで振り返り、その授業改善への利用が望まれる。
履修登録単位数の上限の適切な設定など、単位制度の実質を保つための工夫が行われているか。	学期ごと24単位を履修上限とし、特別に成績優秀者に対して、28単位までの履修を認めている。15週の授業時間を講義曜日にかかわらず確保し、休講に対する補講期間を設けている。シラバスに準備学修の欄を設け学生の予習・復習内容を具体的に指示・明記している。実際の授業外学修時間を授業アンケートによってモニタリングしている。	a : 授業外学修時間のモニタリングを授業アンケートの中で開始した。 b : 15週の講義期間をとる場合、再試験と学外実習(ボランティアや海外語学研修など)の期間が重複する。	授業科目ごとに、授業外学修時間を十分に取れない理由の解析をすすめる。	八王子キャンパスにおいて、90分×15週の講義を100分×14週に改めることを検討している。

自己点検・評価報告書（デザイン学部）

基準3. 教育課程
3-3 学修成果の点検・評価

点検・評価項目	平成26年度から平成30年度 までの実績を踏まえた現状	自己評価 〔 a : 効果が上がった点 b : 改善が必要な点 〕	今後の計画	
			効果が上がっている点の 発展計画	改善が必要な点の改善計画 (次年度計画及び中期的計画)
① 三つのポリシーを踏まえた学修成果の点検・評価方法の確立とその運用				
学生の学修状況・資格取得状況・就職状況の調査、学生の意識調査、就職先の企業アンケートなどにより、学修成果を点検・評価しているか。	学生の単位取得状況、進級率、卒業率については、事務局学務課、学部教授会、学部教務委員会においてデータをまとめている。就職率、就職先については事務局キャリアサポートセンターおよび学部就職委員会で評価している。入学時および年度初めガイダンス時に在学調査を実施し、その結果をIRセンターで解析の上、企画推進会議、学部教授会で報告している。	a : 進級率、卒業率、就職率などの指標が取られ、在学調査が行われている。 b : 学修成果の可視化において、現在、数値化している指標は取得単位数とGPAのみである。より学修内容が可視化されることが望ましい。また学生輩出先についても就職率以外により就職の質を表す指標が必要である。	進級率、卒業率、就職率、在学調査などの結果が、キャリアサポートセンター、学務課、法人の広報部などに分散しており、IRセンターでの一元管理、解析が望まれる。	ラーニングアウトカムズの各項目に対応する学修成果の可視化方法を確立する。コンピテンシーの客観試験による評価、卒業論文指導教員によるコンピテンシー評価などを実施する。また、学生の就職状況の質を評価する方法を検討していく。
② 教育内容・方法及び学修指導等の改善へ向けての学修成果の点検・評価結果のフィードバック				
学修成果の点検・評価の結果を教育内容・方法及び学修指導の改善にフィードバックしているか。	各学生の単位取得状況については、クラス担任が把握し、各学生と半年に一度面談することにより、学生にフィードバックしている。このときに把握した各学生の学修状況が教育内容・方法の改善に役立っている。	a : クラス担任による面談による学生の学修状況の把握 b : カリキュラム改善がより客観的な指標に基づいて行われることが望まれる。	クラス担任による面談の継続的な実施および面談率の向上。	ラーニングアウトカムズの各項目に対応する学修成果の可視化方法の確立に合わせて、カリキュラム改善を科学的に検討する体制の整備とそれを支援する全学的な組織の整備が必要である。